

「一握りの灰と骨になるのなら」

新井聖子 女性相談支援員

中島久美子さま

今夜は興味深い内容のご講義をありがとうございます。

18 時からのプロローグでお話しされた韓国の臓器移植情報に興味が高まりました。

日本と同じ時期にスタートしているのに 7 倍の差がある要因は何なのだろう？ 韓国では、臓器提供者と受けた方それぞれの「ストーリー」が語られる事をお話の中で知り、衝撃を受けました。

厚労省から「感謝状」贈呈で終わる日本のそれとはカタチの違いだけではない大きなものが存在していると思いました。気になって調べてみました。韓国のストーリーとして語られている記事がないか？すると、2016 年 1 月 27 日のハンギョレ新聞に米国留学中の当時 19 歳のキム・ユナさんが交通事故で脳死状態になり、27 人の方々に臓器提供と人体組織の提供をされたという記事を見つけました。

また、3 人のお子さんがいらっしゃるヨヨンさんが、心臓・肺(両側)・肝臓・腎臓(両側)・眼球(両側)を臓器提供された記事もありました。生前からヨヨンさんが臓器提供に深く関心を持っていたことを知っていた夫が「一握りの灰に残されるより、誰かの命を生かす事が彼女の望むことだと確信した」と臓器提供に至った思いをその記事は伝えていました。それらの記事が、「ストーリーとして語られている記事“なのかはわかりませんが、仮名ではなく本名で語られた記事だったのは意外でした。

金銭が絡まぬように日本の JOT のような機関の仲裁の下、決められたマニュアルに沿ってお互いの負担にならない程度の消息だけ伝えることは、遺族側にとっても意義があるものだと思います。息子の心臓が誰かの体の中で懸命に生きているとか、母の角膜が誰かの目になっているとか、そういう消息を知りたいと思うのは、愛する者を亡くした者にとってせめてもの慰めになるように思います。愛する者の一部の命がそこでまた生かされていると考えられる人も増えてくれるのではないかと思います。

2008 年から 2009 年には著名人の臓器提供が相次ぐニュースが流れたことで韓国内の臓器提供者数が増えたという記事も見つけました。検索していると臓器提供に関係した映画やドラマも多くある事もわかりました。そういう意味で、韓国の取り組みと日本の感謝状という違いが、この 7 倍の差にもなっているのだとしたら、日本もそのような取組を積極的に真似したらよいのにはと思いました。

もちろん、久美子さんがおっしゃっていたように両方のプライバシーに配慮をした記事にしなければならないとは思いますが。同じ事象でも相反する意見が飛び交う繊細な部分だけに、提供する遺族も提供される方も個人情報を守守しなければならないのは残念なの

ですが、大切なことだと思います。

現場の体勢が整っていない事で、一部の大学病院に移植手術が逼迫してしまう故の医療体制の問題があることもよくわかりました。国レベルで早急に何とかして欲しい案件です。スマホを握りしめていつ来るかわからない連絡を待っている患者、家族の気持ちを考えると、今の現状は切なくなります。

東大病院の院長の記事がありましたが、一連の報道のおかげで学会や政府が実態調査にやっと乗り出してくれたこと、移植を行うほど赤字になってしまう診療報酬の事が浮上したことは、メディアの大きな力だと思いました。今までは医療従事者の使命で支えられていたという事が、これからは国民の関心を揺さぶり、国がもっと真剣に本気で取り組んでもらわなければならないという風潮を高めていって欲しいです。また、臓器の保存システムや保持時間が今より延長できる医療の進捗も待たれます。

「迷ってますカード」のお話がありましたが、保険者証の裏にチェックを入れるだけでなく、気持ちが決定した人にはアイバンクのように登録制にして「臓器提供しますカード」発行も考えて欲しいと思います。

韓国のヨヨンさんの夫のように「一握りの灰になるのなら…」という同じ思いで私も昨年アイバンクに登録しました。息子にも友人知人にも、万が一のことがあったら仙台の東北大学アイバンクに電話してねと伝えています。臓器提供もしたかったのですが年齢制限があり、見事に断られました。骨や灰になっても誰かの目になって生き続けられることはなんて素敵なのだろうと、その時は思いました。今も同じ思いです。

次は事務局の方に韓国の知り得た情報をお伝えして、感謝状ではなくそんなストーリーを添えて頂けると嬉しいなとお話してみようと思います。

貴重なご講義をいただき久美子さんに感謝申し上げます。

お忙しい日々をお過ごしのことと思います。これからは、”全力で取材にあたる“久美子さんを陰ながら応援させていただきます。